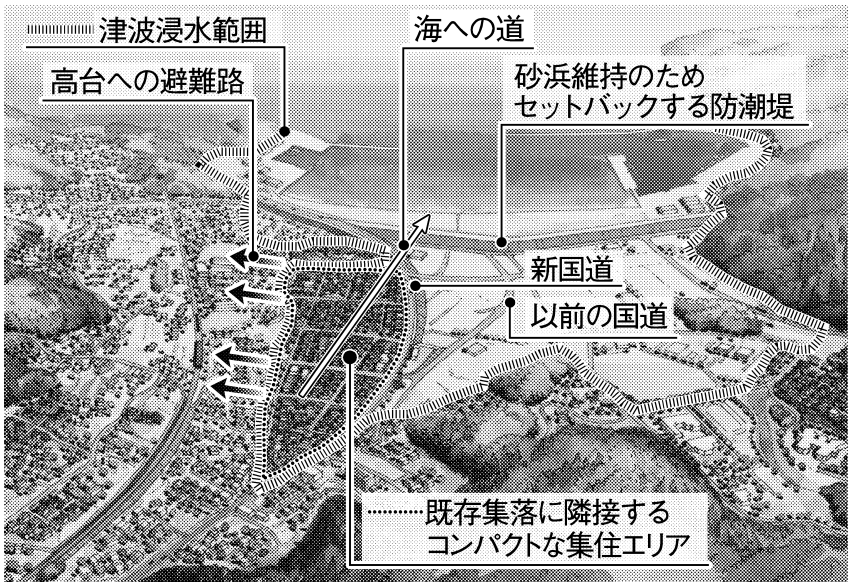


# 岩手県・大槌町における復興まちづくり



吉里吉里地区の空間計画例(「大槌町復興まちづくり完成予想図」に加筆)

## 住民協働で計画進行

### 地区維持しつつ高台へ

東日本大震災から3年半、被災自治体では1日も早い復興を目指し、想像を絶する膨大な作業に取り組み続けており、工事が始まっているところも多い。一方、被災地に関する報道の減少もあり、復興まちづくりの状況はあまり知られていないのが現状だと思われる。しかし被災地で議論されている内容は多くの地方が抱えている課題と共通する点も多く、東南海地震など近い将来に大津波の発生が想定される地域のみならず、多くの地域にとって得るところが大きい。ここでは、これまで外部の専門家として支援してきた大槌町の復興まちづくりにおける空間計画の特徴と住民協働による進め方について私見を交えて紹介したい。

### 空間計画の大まかな流れ

被災後から現在までの空間計画に関わる点だけを大まかにまとめたものが表である。大槌町では町長が津波で亡くなったため、復興に向けた下準備は進められていたものの、本格的に復興計画が動き始めるのは11年8月末の新町長選出後である。碓川豊新町長の公約の1つは、「海のみならず、自然・歴史・文化資源を有する、海と山に囲まれた美しい町である。しかし、東日本大震災の津波により甚大な損害を受け

### 大槌町の被災の概要

大槌町は三陸海岸のほぼ中央に位置し、豊富な自然・歴史・文化資源を有する、海と山に囲まれた美しい町である。しかし、東日本大震災の津波により甚大な損害を受け

### 空間計画の特徴

津波は大切な人々や家財とともに、日常の風景も奪った。平穏な日々にはそれほど意識されなかったが、被災後の人々の思いがたくさん詰まっているのが日常の風景である。全く同じ風景を復元できない以上、復興まちづくりでは地区がこれまで大切にしてきたことを引き継ぐ計画にするべきである。こうした思想のもと、議論はまず集住エリアの設定を中心として進められた。各地区の議論で出された方針は、大きく以下の3点である。一つ目は、個別にはなく、地区全体や周辺との関係を意識し、地区での暮らしや場所の使い方も含めて議論することにより、そこでの空間イメージとしてまとめられていると同時に、復興後の地区全体の姿が表されていることである。このため、今後、

### 空間計画に関わる大まかな流れ

年	月日	具体的な活動	復興計画の進行状況
2011年	3月11日	東日本大震災発生	
	6月	国交省都市局チームによる市街地復興/ターンの検討開始。大槌町は東京建設コンサルタント、邑計画事務所、小野寺康都市設計事務所、イー・エー・ユー、二井昭佳(国士館大学)チームが担当。作業監理委員は大村謙二郎(筑波大学)、中井祐(東京大学)	復興計画の方針と集住範囲の決定
	8月29日	新町長に碓川豊氏が選出	
	9月	大槌町再生創造会議(学識経験者:大村謙二郎、中井祐)と、各地区の協議会が発足	
2012年	10-12月	被災10地区の協議会で、町、住民、設計チーム、コーディネーターが2週間おきに議論。コーディネーターは、町方地区:中井祐、安渡地区:尾崎信(東京大学)、赤浜地区:窪田亜矢・黒瀬武史(東京大学)、吉里吉里地区:浪板地区:二井昭佳・永瀬節治(東京大学)、大ヶ口地区:川添善行(東京大学)、桜木町地区:原松介(東京大学)	地区の骨格の決定
	1月	大槌町東日本大震災津波復興計画(基本計画)策定	
	2月	地区別WGによる地区の骨格の検討開始	
2013年	3月	復興計画の都市計画決定。年間を通じて関係機関との交渉や用地取得に向けた作業	地区の復興まちづくりとそのイメージの決定
	3月	大槌デザイン会議および地区別WGによる空間イメージの検討開始。委員長は中井祐、コーディネーターは、町方、沢山・源水・大ヶ口地区:福島秀哉(東京大学)、安渡・小枕・仲松地区:尾崎信、赤浜地区:窪田亜矢・黒瀬武史、吉里吉里・浪板地区:二井昭佳	
2014年	3月	大槌デザイン会議 最終回(全5回)。地区別WGおよび協議会での議論を踏まえた各地区の復興まちづくりを、具体的な空間イメージとともに大槌デザインノートとしてまとめる	

国士館大学 理工学部 准教授 二井 昭佳

津波被害を免れた山裾の既存集落に接する。あるいはその中に加えるよう集住エリアを設定し、地区全体の重心を高台にシフトしながら、地区のまとまりを維持した計画になっている。次に検討されたのが地区の骨格である。重視されたのは避難のしやすさと地区のたまり場空間の創出である。これがセッパックになるよう、道や場所が災害時の避難路や避難場所になる。すなわち、家から海岸に向かう道を逆にたれば高台の避難所につながる。この避難路の重要な中継地点や避難場所には、地区の人々のたまり場となる広場空間や公共施設が配置されているという空間イメージである。これにより地区内の公共空間のネットワークも強化されている。

あるコーディネーターは、大槌町が復興まちづくりにかかわる空間計画について、計画をまとめる見取り図としての役割を果たすことにもなっている。この結果は、五つの地区でA3サイズ約50ペーシになる大槌デザインノートとしてまとめられている。まとめの段階では、地区のメンバーから「どんな町になるのか?」「今までの以上に良く理解でき、ぜひともこれを実現したい」といった声も聞くことができた。非常に有効な取り組みだったと考えている。

その特徴は、これらを個別にはなく、地区全体や周辺との関係を意識し、地区での暮らしや場所の使い方も含めて議論することにより、そこでの空間イメージとしてまとめられていると同時に、復興後の地区全体の姿が表されていることである。このため、今後、行政・設計者に調整役で

### 空間イメージづくり

大槌町は三陸海岸のほぼ中央に位置し、豊富な自然・歴史・文化資源を有する、海と山に囲まれた美しい町である。しかし、東日本大震災の津波により甚大な損害を受け

### 住民協働の大切さ

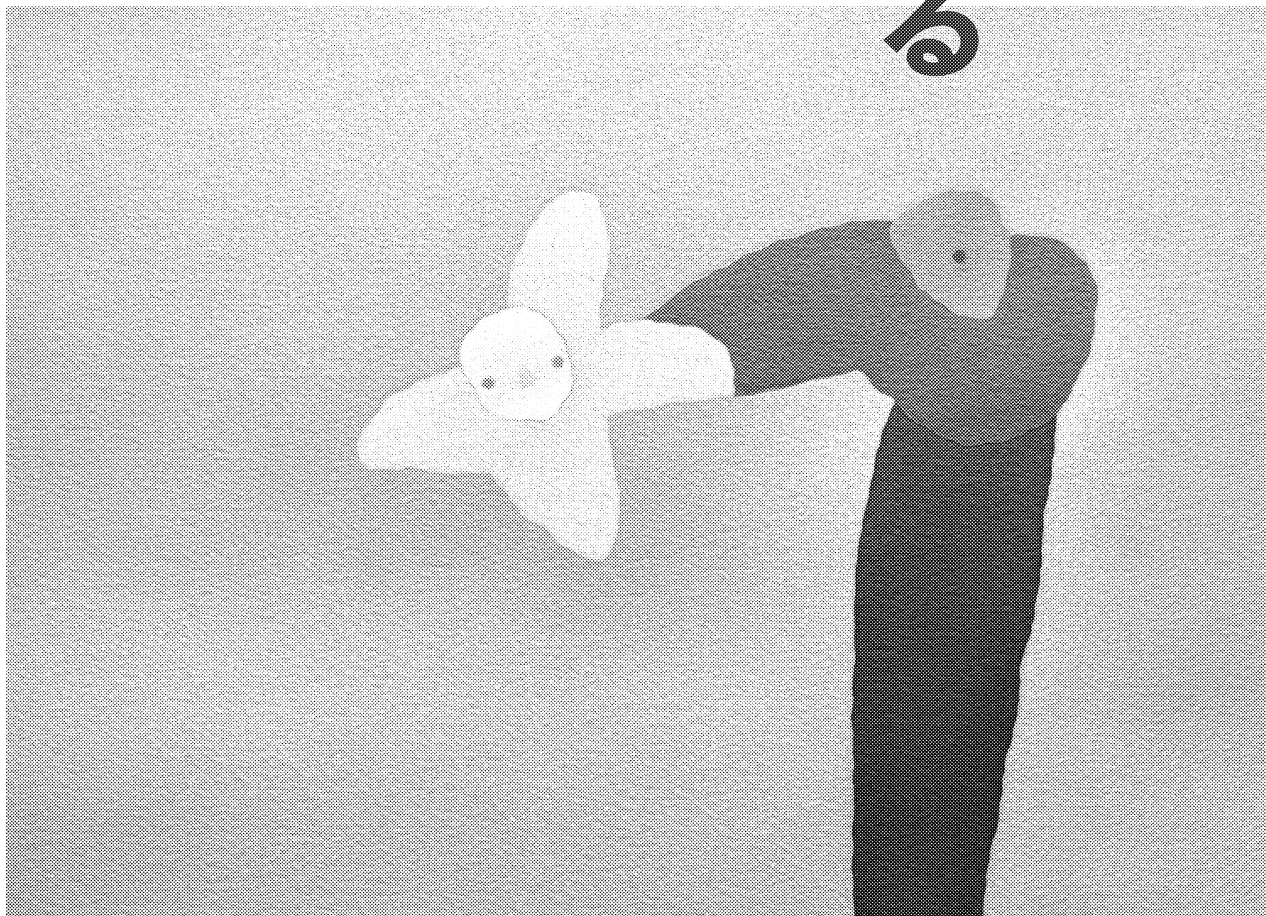
大槌町における復興まちづくりの大きな特徴の一つは、これまで述べてきた計画を住民と協働してまとめた点にある。具体的には、住民・資料の提示と分かりやす

### おわりに

大槌町の復興まちづくりにかかわる空間計画について、概略を紹介した。これらは、各地区の住民の皆さんや応援職員を含む町役場を中心に、国や県の関係機関や設計を担うコンサルタント、筆者を含む学識経験者によって行われてきたものである。ここでは筆者なりの視点でまとめたものであり、記述内容に関わる責任は一切筆者に帰するものである。

## 竹中工務店

# 守る、創る、思いやる、ビルへ。



野坂徹夫・画

災害から人々の暮らしを守る。  
エネルギーを創り、分けあう。  
都市を、そして地球を思いやる。  
これからのビルはこうじゃないとね。

人がつくる。人でつくる。

ここで過ごす人々の姿を、  
ここからはじまるしあわせをイメージしながら。

アイデアでつくろう。情熱でつくろう。  
さまざまな人の想いをつないでつくろう。  
アタマとココロを使って  
人間にしかできないものづくりを目指して。

人がつくる。人でつくる。  
それが戸田建設のやりかたです。

 戸田建設

